家庭科における体験学習の検討と追体験学習へのアプローチ

An Approach to the Method of Learning by Nacherleben through the examination of the Method of Learning by Doing

吉 原 崇 恵

Takae YOSHIHARA

(昭和61年10月11日受理)

はじめに

本報告の主題は，家庭科の目標達成にとって，有効な体験学習のあり方について検討することである。

従来，体験的学習方法は家庭科の学習方法の特質といわれており，具体的には，実験・実習を重視するものである。それは，教授・学習における直観性の原理に通じるものであり，現代の子どもたちの生活経験の乏しさもあいまって，有効な方法と考えられてきている。その場合において，「なすことによって学ぶ（Learning by doing)」優位性を生かしながら，系統性を強化し確実なものにするように価値づけられてきたといえよう。(1)

本報告では，まず，家庭科における体験学習の現代的意義について考察する。次に，二つの実践例から，体験学習の必要性を検証する。二つの実践とは，生活資料の加工技術の習得と材料認識をねらいとする学習と，生活文化としての知識や技術を生み出した人間の力の存在を知させる実践である。その中で，生活文化を生み出した人々の生きた歴史的背景を理解させる教育課程を編成するための視点を追究する。一つの試みとして，『おばあさんの知恵』をとり入れた授業を考察し実践研究を行う。その実践研究は，過去の他人の体験を背景となる諸事情の理解とともに体験させることのできる教育課程をめざすものである。とくに，体験学習を対自化するためには，追体験概念の教育課程への導入に意味があることを明らかにする。

1．家庭科における体験学習の意義

筆者は，家庭科で育てたい能力を「家族を中心とした生命再生産過程（以下，生活とする）についての科学的認識」と「生活文化の伝承と創造の能力」であると考えている。

小学校家庭科の食物領域を例にあげれば，「なぜ，なにを，どのように食べるのか」という過程について，まずは，食品，栄養，調理，という一連の科学的知識と技術を習得させることをねらいとしているのである。そのねらいを達成させるための学習指導は，子どもたちに食事調べをさせて，食品の分類をさせ，そのバランスをみさせるという計画で行ってきている。が，しかし，近年では，そのような展開は出来にくいという声がきかれるようになった。

子どもたちは，食生活の乱れ（たとえば朝食を摂らない，間食が多い）もさることながら，食品を分類しようにも，自分達が何を食べているのかを知らないということである。というの

は，子どもたちは，まず，食品名を知らない（たとえば，キャベツと白菜の区別がつかない），原材料を知らない（とうふは大豆からつくられる），また加工品（ハムやソーセージ，調理済みのものなど）を利用することが多く，原材料がわかりにくいなどの状況に当面するのである。

1977年～1978年に改訂された現行教育課程では小，中，高の各段階において，勤労にかかわる体験学習が強調されている。小学校では「働くことの喜びを得させる」，中学校では「仕事の楽しさや完成の喜びを体得させる」，高校では「正しい勤労観や職業観の育成」を重視し，実践的，体験学習の必要性が唱えられてきた。それは，著しく進んだ生活手段の商品化によって子どもたちが，生活体験や労働体験の機会を失ってきた状況を反映しているものである。

静岡大学教育学部附属浜松小学校の岩井弘美子教諭は，家庭科学習に，次にみるような「体験的活動」を組み入れている。[2]

①生活事象を見つめる活動　家庭生活を観察する，試行する，見学する，これらを通して長い間に受けつがれてきた生活の知恵を見つけていく。また生活事象に含まれている問題に気づいていく。

②生活の科学，合理性を追求する活動　資料を見る，実験する，調査する，試食する，実習する，示演する，これらの活動を通して，比べたり，確めたりするなかで「なぜ，そうするとよいのか」という原理，原則がわかり，生活の合理性を見い出していく。

③自分で創り出していく活動　製作する，改善する，実行する，これらの活動を通して，工夫を加え，自分で創り出す喜びを味わっていく。

以上の考え方は，かつて牧野氏が，家庭科で育成すべき能力構造として論じたものと通じるところがある。[3]

牧野氏の能力構造は，生活事象を見つめる能力を生活の現実認識として，生活の科学性，合理性を追求する能力は，社会科学的，自然科学的認識として，自分で創り出していく能力は，すなわち，技術・技能の習得，実践力，生活課題の自覚と生活の変革力として構想したものであった。

岩井氏の具体的な体験学習と牧野氏の能力構造を対応させてみると，家庭科で育成すべき諸能力を達成するために，体験学習は重要な学習方法として多様な形で展開できることがうかがえるのである。

2．二つの実践例に基づく体験的学習の必要性の検証

(1)滝口実践の場合　技術と材料認識を主とする例

滝口裕美子教諭は1954年生まれの東京の小学校教師である。滝口氏の教材づくりの基本的な考え方と授業の実際をみてみたい。

> なにしろ，子どもは食品そのものを知らないので，カレーライスの材料が何であるのかがわからない。もちろん食品群に分けることなどとうていできないのである。(中略)
> まず「食べものに作りかえ，おいしく食べる」ということが重要な問題なのである。だが実は，それが食物学習の基本であるのではないかと思いついた。(中略)
> 教材づくりを考えるとき念頭においたことは，「個体発生は系統発生をくり返す」という言葉である。
> 人間の生存にとって基本となり典型となる食品は何か，そしてその食品で何を考えるか，などを洗い出す作業を続けた。[4]

以上に引用したものは食教材についての考え方である。他の領域の場合も同様に，教材の配列にあたっては，子どもが「まずからだを使って布や食品などの材料に対する感性的な直接経験[5]を重ねたうえで，最終的な教材で，材料についての認識を整理する」[6]と考えられている。

例として，教材名「大豆を使って」を細かくみると，「きな粉づくり」「みそとみそ汁づくり」[7]「とうふ，ゆばづくり」「大豆のまとめ」という教授項目で構成・配列されている。

この指導計画は，大豆が，日本人の食生活の中で，穀類たん白質の欠点であるリジン・トリプトファンなどを補うことのできるたん白質源としての役割を果してきたすぐれた食糧資源であるとの教材観に基づいてつくられたものである。

そして，大豆を，火や道具・機械を用いて加工し，きな粉，みそ，とうふを作る経験を通して，次に掲げることをねらいとしている。[8]

イ．大豆は食べにくい食品であるが，その欠点を道具や火を用いて有益な食品につくりかえてきた人間の知恵や技術の存在を知る。

ロ．大豆という一つの食品からさまざまな加工食品が作られていることを知り，自分たちのまわりにある加工食品に眼を向けるようにする。

ハ．加工上の共通性に気づき，それが食品の特徴（成分上の特徴を含めて）にもとづいていることがわかる。

ニ．日本の食物文化を代表する食品でありながら，現在では原料の輸入にたよっている事実を知る。

先にあげた，きな粉，みそ，とうふなどの教材は，人々が大豆の消化率を高めるために，加熱・粉砕・発酵・圧搾などの技術をほどこしたことを理解させるものであり，配列であることがわかる。そして，子どもたちに，その都度，消化率の良さを理解させることによって加工技術の価値に気づかせ，それを生み出した生活の知恵[9]に注目させている。

(2)林実践の場合　　人間の力の存在について認識させる例

林信子教諭は大分県宇佐市の小学校教師である。単元「先人の知恵に学んだおやつ作り」は，子どもたちが買って食べるおやつは，砂糖が多く入っているという状況に対する問題意識から設定されたものである。[10]

そして，家庭科で育てたい能力は，自分で自分の体を守れる力，生活を切り拓く力であると考えられており，食教材の場合ならば，体験を通して食べものの本来あるべき姿（全工程）をわからせたいと考えられている。全工程とは，生産―加工―食べるの三工程のことである。林実践では，とくに，「労働」を体験させることによって，“見えない部分”をわからせたいと表現されている。まず，“見えない部分”とは，体を通してわかること，友だちとの連帯，食べものの手に入る過程，労働後の快感などがあげられている。そして，体験とはいわずに「労働」を体験させる[11]という時に，「友だちとの連帯」に象徴されるように，人間の力の存在に注目させたいというねらいが理解されるのである。

前述した，三工程のうち「食べる」ことの学習において，先人の知恵を参考に実習が計画されている。たとえば，子どもたちは実習を通して，麦をよく噛んでみると，歯ごたえや自然の甘みのあることを知り，昔の人々がこの味を生かして，いろいろの料理を工夫して利用してきたことを知ることができる。また，麦から粉が作られる工程で，子どもたちに石うすをひくという体験をさせて，石うすの原理や工程の原理のすばらしさを見直させるような指導計画である。

さらに，名産となっているうどんは，地元の自然が育てた麦を人々がその地の気候の特徴をうまく利用して，加工していることを学ばせるための教材である。このように，生産―加工―食べる，という，どの段階においても先人の知恵，いわゆる人間の力の存在を知らせることに注意を払った教育課程として考えられているということができよう。

以上，滝口実践と林実践の中に占める体験学習のねらいを検討してきた。いずれも食物教材の例であったが，滝口実践における体験学習のねらいは，加工の技術と材料認識を主とするものであった。林実践は，人間の力の存在を知るために，体験学習が位置づけられていた。そして，二人に共通することは，食べるための材料に対する知識や加工の技術は，人間の食生活の歴史の中で作り出されたものとする認識である。

生活文化としての知識や技術の習得のために体験学習が必要であるという例をみてきたわけであるが，知識・技術を生みだした人々の心情や，その時の諸事情を理解する必要はないのだろうか。

人間をとりまく外的諸要因（これを環境という）と人間の対応の仕方，また環境への働きかけの仕方，などを学ぶことにおいて，過去の他人の体験に習うことは一方法として試みたいことである。従って過去の他人の体験を，生活の歴史の領域としてとらえ，体験学習を生活史的視点で構想することの有効性を考えてみたい。

3　生活史的体験学習の有効性とその実践

生活文化としての知識や技術を過去の人々が生み出した歴史的・社会的・自然的背景とともに学ばせる学習を「生活史的体験学習」と名づけた。

今回は，1970年代に出版された『おばあさんの知恵袋』[12]や『おばあさんの引出し』[13]などの文献（以下『おばあさんの知恵』）を取り入れた授業を構想し，実践を試みた。

①はじめに

前段でとりあげた滝口実践と林実践における体験学習は，子どもたちが，実習や実験など，直接にモノに働きかけるという意味で，直接体験の学習形態をとっていた。今回，試みた実践においては，子どもたちは直接体験の学習形態に加えて，『おばあさんの知恵』を資料にするという，いわば間接的な体験をするものである。

本授業では，一つの教材につき対照群クラスに対照案で，研究群クラスに研究案で，実践した。研究案が『おばあさんの知恵』の資料を盛りこんだオリジナル案である。授業と教材の効果を判定するためにプリテストとポストテスト，観察者による評定尺度，合評会などを行った。実施は1981年12月である。

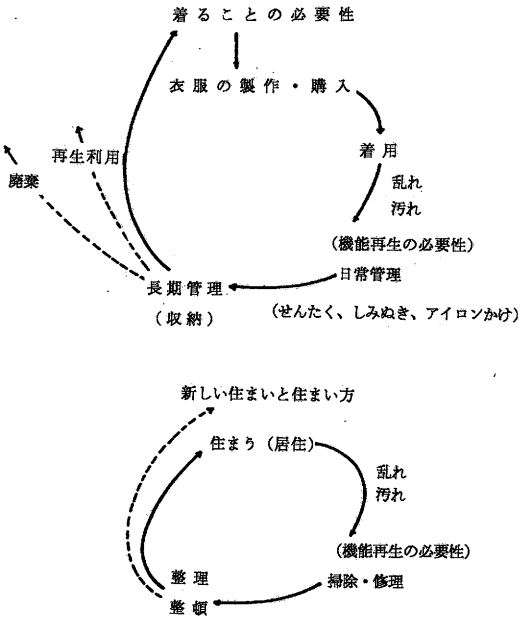
まず，『おばあさんの知恵』に，なにゆえ注目し，どのような文化的・教材的価値があると考えるのか，について，次のように規定した。おばあさんの知恵とは，「ひとりのおばあさんを通してみることのできる，人々が長い年月をかけた生活の中で身につけている実践的な知識や能力のこと」であり，「背景には，積み上げられてきた貴重な歴史が存在する」と考えた。

そこから，『おばあさんの知恵』を教育課程の中に取り入れることによる効果を，次の４点と仮定した。それらは，イ．生活活動に対する多方面からの興味づけを促すことができる。ロ．生活活動に際する原理や本質が暗示される。ハ．現在では，すでに失われつつある風習や文化を学ぶことができる。ニ．前時代の生活における不便や困難を知り，そこで培われたものを理解して現代の生活全般を見直す視点を得る。というものである。

とくに，ハとニについて，表現をかえれば，すなわち，人間と環境とのかかわり方の関係認識，生活の現実認識，自己の生活態度の省察などを導き発展させることを意味している。

教材は，衣領域（中学二年用）と住領域（小学五年用）を準備し，衣生活や住生活をサイクルとしてとらえた中から，「収納・保管」「掃除・修理」を機能再生のための管理として位置づけた。（図１）

図１　衣生活および住生活のサイクル



②授業の記録と考察

ａ．衣教材の場合―静岡大学教育学部附属静岡中学校第２学年　1981年12月17日，授業者，遠藤珠実

衣類の保管についての事前の調査を表１の形で実施した。対照群も研究群も同じ傾向で，「長く大切に着ていくことは衣生活の中で重要なことだと思って」いるのだけれど，「衣類の入れかえや収納を自分でやりたい」とは思わないし，「家の人がどのように衣類の入れかえを行っているかを知りたい」とは思わない。

すなわち，保管についてほとんど関心をもってはいないということがわかった。

対照群の授業の記録は表２である。また，研究群の授業の記録は表３である。

授業後のテストは自由記述で行った。

以下に生徒たちの自由記述の中から対照群と研究群の特徴をあらわしているものを列挙する。

対照群

Ｐ1 衣類の保管ということで授業をした。まずクリモグラフというので世界の気候の様子を比べた。日本の東京と三都市[14]を例にあげる。それからわかったことは，日本は季節がはっきりしている。降水量が夏期は多い。それによって温暖湿潤気候ということは湿度が高い気候ということだ。それから気温の変化も大きいため衣服をかえる必要がある。すると着ていない服の保管をする。湿度が高いので保管の時，工夫しなければならない。その工夫のしかたは，しまう時よく乾燥させることによって，虫干しをすること。それはカビを防ぐ。それと保管する時は，名札によって収納場所をはっきりさせるということがわかった。

Ｐ2 衣更えは，すぐにできるように収納場所を考える。

Ｐ3 私の家では，大きいはこを使っているのですが，こういうのは虫がわくもとではないでしょうか。おまけに，そのはこの中にパラゾール（防虫剤）が，たったの２つしかはいっていません。ここらへんはかんがえたいです。また，すずしい所におくということをわすれていたようですので，家へかえったらまっさきにやりたいです。

Ｐ4 今まで，お母さんが服のかんりをやってくれたけれど，それには，こんなに深いイミがあった。今まで母に衣生活をまかせきりだったが，新しい知識を身につけたので，少しは手伝うことができる。

表1　衣類の保管についてのプリテスト形式

＊例のように　あてはまると思うところに○をつけて下さい。

(例)受験勉強は大切だと

強く思う　○　思う　思わない

↑「強く思う」と「思う」の間ぐらいならここに○をつける。

A.衣類の入れかえや収納を自分でやりたいと

強く思う　思う　思わない

B.家の人がどのように衣類の入れかえを行っているかを

非常に知りたい　知りたい　知りたくない

C.今後自分なりの衣類のしまい方を考え出してみたいと

強く思う　思う　思わない

D.衣類の管理をいかにしていったらよいのか

よくわかる　わかる　わからない

E.衣類の管理は"衣生活"全体とかかわらせて考えるべきだと

強く思う　思う　思わない

F.「長く大切に着ていくこと」は"衣生活"の中で重要なことだと

強く思う　思う　思わない

G.衣生活を合理的に営む方法を考える姿勢を

いつも持っている　持っている　持っていない

H.衣服の管理、保存について思ったことを何でも書いて下さい。

以上P1～P4は生徒たちの心に残ったことがらを代表するものである。P1は衣類の保管の必要性と方法について根拠をもってわかっているといえよう。P2は，図1に示した衣生活のサイクルに気がついている。P3は，問題を発見し改善していこうとする関心が深まった。P4は，家族の衣類の管理を担っていた母に気がついて，自分も手伝うことができると見通しをもっている。

いずれも，クリモグラフによる気候の特徴を理解したことによって気候と衣更えの必要，それに伴う保管の必要という間の関連をよくとらえている。

研究群

P5 昔の人と今の人のくらし方のちがいが衣服の着方やせいりによってわかるとは思ってもみませんでした。家庭科もふかくかんがえるといろんなことがわかるんだなあと思いました。

P6 昔の人の知恵は大したものだ。

P7 世の中だんだん便利になっていきますが，その反面，昔の人の知恵が失われていくのはさびしいことだと思った。

P8 昔の人たちはいろんな工夫をしてえらいと思いました。私はめぐまれているので，そういうふうに工夫することはありません。それに，おかあさんに大部分やってもらっているので自分の服なら自分で整とんしたい。

P9 このおばあさんのようにしっかり整理してきちんとした生活をしていきたいです。

P10 これからは衣類の管理をしっかりとして服を長持ちさせようと思った。ひとつの服を大切に着たい。昔の人のように一つの服を最後まで大切に着たいと思います。

表2　衣類の保管　対照群授業記録　中2　男女45名

教師の働きかけ	生徒の反応
◦この時間は「衣類の保管」について考えていこう。	
◦皆さんの家では夏の間冬の衣服を冬の間夏の服をどうしているだろう。	◦タンスにしまってある。 ◦タンスに防虫剤を入れてしまってある。モスボックスに入れてある。 ◦押し入れの中に箱を用意してしまってある。 ◦プラスチックの衣裳ケースの中に防虫剤を入れてしまってある。 ◦缶のような衣裳ケースの中にモスノーみたいなものを入れてしまってある。
制服やスーツみたいなものはどうしているだろう。	◦ハンガーにかけて吊してある。
◦皆さんの家では年何回くらい衣服の入れかえを行っているだろう。	◦2回～夏服と冬服を入れかえる。 (15.6人) ◦3回　(少数) ◦4回～季節のかわり目に行う。 (2人)
◦「衣類の保管」について日本の気候の特長と考え合わせながら見ていこう。 (OHPによりクリモグラフの提示、説明)	(班で話し合い) ◦グラフの線を辿っていくと季節のかわり目がわかる。
◦クリモグラフを見てどんなことに気づくだろう。班で話し合おう。どうして四季がわかるのか。気温以外に気づいたことは。	◦四季がはっきりしている。 ◦気温の巾が大きいことから季節があることがわかる。 ◦降水量も巾が大きい。年間を通じて変化が大きい。 ◦月毎にたどっていくと夏から秋にかけて特に湿度が高い。 ◦シンガポールなどに比べると気温差が大きいことがとてもよくわかる。 ◦オデッサやゴッドホープと比べると降水量の巾が大きいことがよくわかるし、グラフが斜めに大きく広がっている。

教師の働きかけ	生徒の反応
全体的にどういう気候の特色があるか。	◦温暖湿潤
◦これらの気候の特色をふまえて衣生活において工夫しなければならないことはどんなことか。 班で話し合おう。	(班で話し合い) ◦1年中暑い所や1年中寒い所はずっと同じ服を着ていればよいけれど、日本は四季があるから季節に合った服を着なければならない。 ◦季節に合わせて「衣更え」をする。
(クリモグラフに防虫防カビ要注意領域を書き加える。)	◦湿気が多いから害虫などに気をつける。 ◦湿気が多いからカビなどにも注意しなければならない。
(「虫干し」を簡単に説明する。)	◦湿気をとるように季節のかわり目に収納する前に「虫干し」をする。
◦「衣更え」を円滑にする為にどのような収納の工夫を具体的にしてるだろう。	◦すぐに使う衣服は前に出しておく。 ◦季節の服は手前にして他の季節の服は奥へ入れておく。 ◦種類別に名札をつけて何がどこに入っているのかわかるようにしておく。
◦虫よけには「虫干し」の他にどのようにしているか。	◦パラゾールやモスノーを入れる。 ◦衣裳ケースの中に衣服と一緒に防虫剤を入れる。
◦日本の気候の特色、つまり四季があり温暖湿潤であることをふまえて、季節に合わせた更衣やそれに備えた収納方法、防虫等に気をつけて「衣類の保管」を自らやってみよう。	

表３　衣類の保管　研究群授業記録　中２　男女46名

教師の働きかけ	生徒の反応
◦この時間は「衣類の保管」について考えていこう。	
◦皆さんの家では夏の間冬の衣類を冬の間夏の衣類をどうしているだろう。	◦タンスにたたんでしまってある。
	◦モスボックスに入れて防虫剤を入れてしまってある。
	◦プラスチックの衣裳ケースに入れて押し入れの中にしまってある。
	◦特に入れかえたりしないけれど着ない服はハンガーに吊してモスビーズをかけて洋服ダンスの奥の方にかけてある。
	◦ビニール袋に防虫剤と一緒に入れて押し入れにしまう。
	◦入れかえのたびに着れる服と着れない服と区別して着れない服は人にあげたりして着れる服だけ整理してしまう。
◦皆さんの家では年何回くらい衣類の入れかえを行っているだろう。	◦２回～春と秋（大部分）
	◦入れかえはしない。（４人）
◦昔の(明治時代の)人々は年何回衣類の入れかえを行っていたと思うか。	◦２回～今と同じ。
	◦洋服が少ないからやらない。
	◦４回～季節ごと
◦「衣更え」について知っていることを発表しよう。	◦季節の変化に応じて夏物から冬物へ、冬物から夏物へ衣類を入れかえた。
	◦今でも６月と10月に制服などをかえる。
	◦衣服だけでなく帽子などの小物も変わると思う。
(資料１より昔は６月１日と10月１日の年２回の衣更えに備え衣類の入れかえを行っていたことを説明する。)	

教師の働きかけ	生徒の反応
(資料２を読ませる。)	
◦資料を読んで思ったことや感じたことを自由に意見しよう。班で話し合おう。	(班で話し合い)
	◦昔の人たちはあまり衣服がなく、一枚の着物を大切に着ていた。
	◦平安時代から800年以上くらいも続いた衣更えが今なくなってしまうのは悲しい。
	◦かたくるしい気がする。
	◦風習がなくなるのは寂しいが、それだけ他のことが便利になってきて、夏でも冬でも着れる衣服が出てきたり、そういうふうになってきのは逆に良いことだと思う。
◦これから衣類の保管を行っていく際、衣更えの風習についてまた思いおこしてみよう。	
◦衣類の入れかえの際、収納方法で工夫しているのはどんな点だろう。	◦ダンボールの箱に入れて整理する。
	◦モスボックスのひき出し型に入れる。洋服の種類別に分けて整理する。
	◦ふだん着は出し易い所にしまって、よそゆきは箱の下とかに入れる。
◦資料３を読んで押入れの整理の工夫を図示してみよう。(資料３の押入れ整理の作図を板書)	(作図)
◦収納方法については位置を工夫したり、カードを貼ったり、防虫剤を入れるなど気を配ろう。	
◦昔の人の工夫や苦労を知り、自分の「衣類の保管」についてもう一度考えてみよう。	

以上P5～P10は研究群の生徒にみられた事項である。P5は，この授業を単に（と表現したわけではないが）衣服の着方や整理のしかたを学ぶものではなく，環境の変化とくらし方の変化に関係があることに気がついて，驚きをもっている。P7，P8は授業中の討論で出された「風習がなくなるのは寂しいが，その分，他のことが便利になってきて，夏でも冬でも着れる衣服が出てきたり，そういうふうになってきたのは逆に良いことだと思う」という発言と同様のものである。これらの考えは，資料[15]の「いまは暖房完備なら冬に夏服もよし……」をふまえたものである。そして，現在の自分たちは，恵まれている，という受けとめ方に留まってしまっている。しかし冷暖房の完備した現代の室内環境の状況をとりあげながら，なおも，人間の体温調節機能の重要さをおさえたり，あふれる衣料の収納に空間を占領されるという矛盾など，現代生活における衣更えや保管のあり方へと発展させる教育課程が必要である。

対照群と研究群の比較をしてわかることがある。対照群においては，クリモグラフを資料としたことによって，季節や気候の変化に対応した衣生活のあり方を理解している。この根拠については研究群では「なんとなく」に留っているが，衣更えや保管が人の手によってなされた事実を身近に感じているといえよう。そして「ひとつの服を長く着たい」「しっかり整理してきちんとした生活をしたい」という羨望に似た気持を定着させることが必要である。そのためには「昔は大変だった」という認識に留らせず，衣類を大切にせざるを得なかった諸事情を綿密な資料を提示して理解させることが必要になってくる。

いいかえれば，諸事情のもとでのくらし方の中に，生徒を入りこませるようなすじ道[16]を経て「自分ならどうする」と気をもむような状況をつくり出せる時，昔の人々と共感するということができる。そして，この体験を生かして，現在はどうなっているのか，と認識が発展するための教育課程編成に導いていきたい。

b．住教材の場合―静岡大学教育学部附属小学校第5学年　1981年12月18日　授業者
川本真由美

衣教材の場合と同様に授業を行う前に，子どもたちの住居管理として典型的な，掃除について表4の形で意識を調べた。

その結果，掃除について，自分が行うことや家の人がしていることに対する関心度において，対照群はプラス傾向であり，研究群はマイナス傾向であった。表5，表6は各々，対照群，研究群の授業記録である。以下，授業中の発言やポストテストの自由記述にあらわれた各々の群の特徴を比較してみよう。

いずれの場合も，授業展開の中に，ゴミを集めてそれを観察，分類させる体験学習をとり入れている。㋑両群とも共通して，「ゴミはなぜ出るのだろう」ということについて，「生活すれば自然に出るごみ」と「落し物，失した物などゴミにしているもの」とがあることを発見させている。さらに，両群のちがいに注目してみると，㋺すまいと環境との関係のとらえ方に関して，対照群では，ゴミが処理されなかったら，「電球にゴミやほこりがつくと部屋が暗くなる」「海にゴミを捨てると人間だけでなく魚が死んだり自然にも害がある」などと考えた。研究群では，資料[17]から，おばあさんたちがくらした時代は，ゴミは「雨の日は泥，乾けば砂ぼこり」，家のまわりの様子は「一面に田畑が広がり，道も舗装してなかった」「ガラス戸も小さく何枚もはめてすき間がたくさんあった」ことを読みとっている。さらに，自分達の教室で集めたゴミの観察，分類をして，昔のゴミと比較して，「昔は砂ぼこり，泥などが多かったけど，今は工場で作ったもの身のまわりのもの」「化学繊維やチョークとかビニール製品」「昔はどうしても自然に入ってしまうゴミだったが今は人間が出す

ゴミが多い」「まだ工夫すれば使えるようなものが多い」と思考が展開している。すなわち，研究群の方は，昔と今の環境のちがいと住まいの中のゴミのちがいを関連づけることが出来た。昔は日に二度も几帳面に掃除をする必要があったことを考える中で，現実の自分達は，「気をつければゴミにはしなくてすむ」はずだと自省している様子がみられた。㈧健康で気持よく住まう方法とか，だれがそれを担うのかということに関する記述では，対照群で「いつもざつにそうじをしていたけれど，そうじをしないと健康のために，また体に害があることがわかりました」と自分をふりかえることができている。研究群でも「お母さんは，毎日毎日そうじをしてくれて，ふけつなどにならないわけがじゅう分わかりました。今までのことをふり返ってお母さん一人だと大変なので，わたしも手伝います」と子どもは，具体的なお母さんの姿を思い起して，さらに自分を省みている。

こうしてみると，研究群は，授業前に対照群よりも関心度がマイナス傾向にあったわけだから，その変容がみられたといえよう。ゴミを少なくすることや，そうじの工夫，実践しょうとする気持においてより具体的なイメージを伴っていることがうかがえるし，仕事の担い手を意識することができた点が特徴的だと思われる。

それは，『おばあさんの知恵』を通して，おばあさんが生きた環境と自分たちが生きている環境のちがいとゴミや管理のしかたのちがいを関連づけて思考し，発展させたのだといえよう。その思考の発展途上に現在の自分の姿がみえてきたのではないだろうか。

表4　掃除についてのプリテスト形式

※例のように、あてはまると思うところに○をつけて下さい。
(例)小ねこはかわいいと
強く思う　⊕　思う　思わない
↑「強く思う」と「思う」の間ぐらいなら、ここに○をつける。

A.学校や家のそうじを自分からすすんでしたいと
強く思う　思う　思わない

B.家の人がどのようにそうじしているかを
非常に知りたい　知りたい　知りたくない

C.今後自分なりにそうじの仕方を工夫してみたいと
強く思う　思う　思わない

また、自分なりにごみを少なくする方法を工夫してみたいと
強く思う　思う　思わない

D.そうじは生活していく中で大切なことだと
強く思う　思う　思わない

E.すまいと環境(まわりの様子)は関係があると
強く思う　思う　思わない

F.生活の中で健康で気持ち良くすまう方法を
ぜひ見つけたい　見つけたい　見つけたくない

G.そうじについて思ったことを何でも書いて下さい。

③まとめ

授業を実施するにあたって，『おばあさんの知恵』を教育課程の中に取り入れることについて仮説にあげた効果の中で，達成できたと思われるものは，「前時代における不便や困難を知り，人間と環境とのかかわり方を理解して，現代の生活全般を見直す視点を得ることができるといえよう。その過程で子どもたちの中に「昔の人は大変だった。偉かった」という感情が生まれた。

しかし，問題がないわけではない。「今は楽になって良かった」と受けとめる場合もあった。この認識では，生活の現実認識や問題解決の思考の発展が期待できなくなるかもしれない。とすると生活の改善やよりよい創造への態度も生まれにくいだろう。この点は教育課程の編成の上でどうしても克服したい点である。

『おばあさんの知恵』を導入した今回の生活史的体験学習の実践で得られた成果は二点である。一つは，「前時代における不便や困難を知り，人間と環境とのかかわり方を理解して，現代の生活全般を見直す視点を得る」ことである。二つには，他人の体験を，自分の体験としてとらえることを押しすすめる必要が明らかになって，その対自化を行うことのできる綿密な資料の提示の必要性が鮮明になった。

4　体験学習の対自化としての追体験の意味

生活の知識や技術などの文化が生み出された諸事情を教育課程に組み入れた体験学習のあり方を追究している目的は，究極的には，子どもたちが，生活の現実認識をふまえて，自らを生活文化の伝承と創造の担い手として自覚できるように育てるためである。

滝口実践では，体験学習を通して，加工技術や材料認識を育てようとしていた。

林実践では，生活の知識や技術が人間の手によってなされたことの認識をねらいとしていた。

また，生活史的体験学習としての今回の『おばあさんの知恵』学習では，人間と環境とのかかわり方を理解させ，昔の人に対する尊敬の念を引き出すことができた。

そして，家庭科の能力目標を達成するための体験学習に必要な視点が明らかになってきた。

自分ならどうする，何ができる，という思考の体験をさせるために，生活文化を創り出してきた人々の努力や生き方を共感できるような，当時の事情の中に子どもたちを入りこませていくことである。すなわち，当事者性としての体験という意味で，体験の対自化を追究する必要があり，それを容易にさせる教育課程のあり方を開発しなければならない。

そこで，今，追体験概念に注目してみたい。追体験とは，もともとは臨床心理学の分野にあったものである。辞典類の規定は次のようなものである。

i　他人の体験を自分の体験として生き生きと，とらえること[18]

ii　或る体験を自分のものとして体験すること[19]

iii　他の人がとらえた精神的体験を自分の体験のなかに取り入れることである。ある人が他の人の表情の意味をとらえたというような場合，問題なのは，ただ単なる表情の知覚ではなく，その人の表情のうしろにあるかれの生活史的体験のなかに，自分を没入させ，そして，それをとらえたといえるのである。その人の身になって感じるのである。このような場合，了解ということばも用いられる。芸術作品を鑑賞する場合にも，この追体験や了解の働きは必要であって，これがないと単なる形式の鑑賞だけに終ってしまう。[20]

表5　気持ちよい住まい　対照群授業記録　小5　男女43名

教師の働きかけ	子どものあらわれ
◦今日は〝そうじ〟について勉強します。	
(班ごとになってゴミを集めた袋をとりに来させる)	
◦ゴミの袋を観察しよう。どんなゴミがあったかな。	(ノートに記入) ◦三角巾◦髪の毛◦まだ使える鉛筆 ◦とりのえさ◦はっぱ◦ほうきの毛 ◦けしゴムのかす◦ほこり◦はながみ ◦紙テープ◦黒いひも◦ばんそうこう ◦ひも◦ゴキブリ◦輪ゴム
◦このようなゴミを観察してどう思ったかな。	◦細かいものばかり入っていた。大きいゴミはゴミばこにすてるので、小石や砂ばかりだった。 ◦消しゴムやえんぴつなどで使えるものがあった。 ◦洗たくばさみなどもあった。 ーもったいない。
◦消しゴムやえんぴつなどはゴミ？ーー落し物だね。	◦牛乳パックはまとめて捨てるようになっているのに牛乳パックを落としてそのままの人がいた。
◦牛乳パックをおとしてゴミにしているのは何故かな。	◦いろいろな物をもっていて落してまったとか、机の上から落ちたとかして、そのままゴミになっている。 ゴミ箱に捨てないでおとしまう。 ◦捨ててあるのを気がついても拾わない。
◦どうしてこんなにゴミが出るのだろう。	◦バスケットのようにゴミ箱に投げ捨てて、入らなかったらそのままにしておくから、教室のすみにたまっているほこりを、面倒臭がってそのままにしておく。

	◦ほこりのことだけど、はたいたり、外に出ると服をはたいたりすると出る。わざとでないけれど、服についたほこりがゴミになる。
◦自然に出てくるゴミもあるね。(まとめ)	
◦それではゴミはどういうふうに処理されているだろうか。	◦これは家だけど、燃えるゴミが週2回、燃えないゴミが月1回決められた日に出しにいく。 ◦家で焼却炉を作ってあったので、そこで燃やした。 ◦学校では、そうじの時に集めて焼却炉にもっていく。 ◦みんな飛んたり出したりすることを言っているが、ゴミをほうきで前から後ろへ持っていってちりとりにとってからみんなのように1つのところに持っていく。 ◦穴にうめてしまう。
◦ゴミがそのまま処理されなかったらどうなるだろう。	◦そのままそうじをしなかったら、ゴミが教室に残ってほこりっぽくなるとせきが出たり、バイ菌が出て伝染病になったりする。 ◦ほこりっぽくなると服に汚れがついたりして、洗濯するのに大変になる。 ◦勉強するのに気持ち悪いし健康のために良くない。 ◦空気が汚れてしまう。体に害がある。 ◦人間だけでなく、海にゴミを捨てると食糧不足になったり魚が死んだり自然にも害がある。 ◦電球にゴミやほこりがつくと、部屋が暗くなる。ついてなければもっと明るいのに暗くなってしまう。 ◦ほこりがあると部屋が狭くなる。

◦ゴミやほこりをなくしたり少なくするにはどうしたらよいだろう。	◦そうじをする。 ◦もっと自分が気をつける。 ◦(つけ加えて)自然に出てしまうゴミは仕方がないけどそれ以外はそれぞれ自分で気をつけてゴミを出さないようにする。 ◦ゴミを見つけたらすぐ拾う。 (自分で気をつけるにつけ加えて)洋服につく自然に出るゴミを少なくするには清潔にすればよい。 ◦自分で気をつける他に、学校では自分だけでなくクラス全員で注意するようにする。ていねいにそうじする。 ◦部屋の隅から隅までそうじする。 ◦そうじの際中にはまじめにやるが、ふつうの時からしっかり気をつける。 ◦教室にゴミが落ちていて金曜日の給食の時にゴミを出さないようにすればよい。(米飯だから) ◦使える物は使える物で区別してそうじの時に注意して拾って捨てる物だけ捨てるというように心がける。 ◦えんぴつなどの小さな物は名前を書いておけばよい。そうすれば早く持ち主の所に届く。
(まとめ)	
◦皆、そうじ好き？	◦好きでない。 やらされているだけー
◦大そうじももうすぐなのでしっかりそうじして好きになって下さい!!	

表6　気持ちよい住まい　研究群授業記録　小5　男女42名

教師の働き	子供のあらわれ
	◦キーホルダーの折れたの◦えんぴつのけずったかす◦画びょう
◦昔のゴミと比べてどう違うか。	
	◦昔は砂ぼこり、泥などが多かったけど、今は工場で作ったものや身のまわりのもの。
	◦化学繊維やチョークとかビニール製品
	◦昔はどうしても自然に入ってしまうゴミだったが今は人間が出すコミが多い。
	◦まだ工夫すれば使えるようなものが多い。
◦えんぴつとか消しゴムはごみかな。	
	◦落した物なくした物をはいてしまっている。ゴミじゃない。落し物。人間が出す物。
	◦昔のゴミはどうしても自然の為に出てきてしまう物で今は舗装などされて、あまりゴミが入らないので人間の落したゴミが多いから自分で気をつければなんとかなる物。
◦石や砂は自然に入ってくるゴミだね。人間が出したり外から入ったりするゴミだけだろうか。	◦運動場で遊んでいると服に砂やほこりがついてくる。 ◦それだけでなく、自分達の教室で飼っている鳥のえさなど、動物の出すゴミもある。
◦髪の毛やほうきの毛はどこから出てくるだろうか。髪の毛は人間から出てくるけれど・・・	◦自然に出るゴミ！
(ゴミのまとめ)	
◦ゴミには人間が又は動物が出すゴミ、外から入ってくるゴミ、自然に出てしまうゴミがあるね。	
このようなゴミがそのままおかれたらどうなるだろうか。	◦ふとんを敷く時、あったゴミが舞い上がってまたおちたり舞い上がったりのくり返しで、ほこりだらけになる。（略）(17)

教師の働き	子どものあらわれ
◦今日はそうじについて勉強します。	
皆、そうじ好き？	ー嫌い
そうじはいつやる？	5時間目と6時間目の間にやる。
(『おばあさんの知恵袋』紹介)	◦2回やるというのは午前と午後のことだと思う。午前は朝とか寝ている間に出たほこりを拾って、午後は午前のごみを掃除すると思う。
◦（資料(1)を読んで）どうして昔は2回も几帳面にそうじをやる必要があったのか想像してみよう。	◦まだいろいろな病気があったと思うので、身の回りをきれいにしないと病気が防げなかったから。 ◦午前はここととここの部屋をそうじして午後はここをやるというように分担して違う場所をやったと思う。 ◦朝の食事と昼の食事の後にやったのではないかと思う。
◦（資料(2)を読んで）おばあさん達がくらした時代は、ゴミやまわりの様子はどんなだっただろう。	◦ゴミはー 「雨の日は泥、乾けば砂ぼこり」 ◦家のまわりの様子はー 「一面に田畑が広がり道も舗装してなかった。」 「ガラス戸も小さく何枚もはめてすき間がたくさんあった。」
◦そうじの時ゴミを集めてくれたけど、それをとりに来るように。どんなゴミがあったかな。	◦紙くずやほこり◦ビニール袋、テープ、ひも、ビニール製品◦折れたえんぴつ◦人の髪の毛 ◦使ったもののかす◦消しゴムのかす◦給食のかす ◦かたまったもの　◦チョーク　◦ほうきの毛 ◦ごきぶり　◦花びら　◦輪ゴム　◦折り紙 ◦石、砂　◦ガラスの破片◦みかんの食べかす

このような追体験の概念規定をみると，他人の体験を自分のものとする意味において，家庭科における体験学習の対自化の課題に迫りうる概念だと思われる。

いいかえれば，追体験概念を用いることによって，対自化を容易にする教育課程の開発が具体的なものになるといえよう。

時代を超えた他人の体験を自分のものにさせるには，まず，時代を了解する綿密な資料を子どもたちに提示して，子どもたちを当時の事情の中に入りこませることが必要である。そこにおいて，だれが，なんのために，どのようにして，生活文化としての知識や技術を創り出したのかを学ばせるようにしたいものである。そして，自分ならどうする，自分にできることは何か，と気をもむような心情を体験させるのである。そのような思考体験を土台にしながら，生活の現実認識へと発展させたいものと考える。

これらの教育課程を開発するにあたって，追体験概念を意識的に利用することが適当であると認めるものである。

結　　び

子どもたちの生活経験の貧しさの原因には，商品化社会の生活様式，核家族化による生活文化の伝承の断絶，受験戦争や自然環境の荒廃などの影響がある。

教育現場では，すでに1960年代後半から学力論争（ネギ論争やニワトリの四本足論争を発端として）や，「子どもの遊びと手の労働研究会」の発足という形で，子どもたちの生活認識や生活自立能力の低下に対して取り組んできた。1977～78年の現行学習指導要領で体験学習が強調されたのは労働体験の機会が減少した状況を補完する側面もあったといえよう。

そして現在，臨時教育審議会の第二次答申において，家庭の教育力の活性化の課題を大きくとりあげ，家庭で担うべきことは家庭へ押し戻すという方策を打ち出している。

教科教育の立場からすると，授業以前の段階で，子どもたちには，豊かな生活経験に裏づけされた生活認識をもって教室へと登場してきて欲しいと願うところである。

しかしながら，現在の生活様式のもとで，個々の家庭の努力に依拠するには，課題が大きすぎる面もある。

他方，学校でしか，体験させられないことがあるのも事実である。たとえば，ミクロなレベルでの科学性を追究する実験，モノや事象の見えない部分を顕在化させていく実習や加工製造の体験，集団作業による連帯感，責任感や協調性の要請などは，個々の家庭では，なかなか体験させにくいことである。

また，今回，問題にした「追体験」のように，時代や地域を超えながらも他人の体験を自分のものにできるために，綿密な事実を構成する資料が必要となって，これもまた，学校教育ならではの計画的な体験学習である。

このような意味でも，追体験学習について，本報告の試論をもとに，具体的展開にとりくむ意義が大きい。

表7　衣教材研究群の配布資料

。衣更え

六月一日は単衣の衣更えで、この日から後は、袷を着ることはありません。五月三一日までは、暑くてもなんでも、外出の時は絹の袷と決まっていました。五月になれば布地も薄いものを用い、長襦袢も単衣を着ていましたけれど、ともかくも、五月いっぱいは袷、六月一日からは単衣というのがきまりでした。

十月一日は、袷の衣更えの日。この週間は、厳しく守られていて、一日もゆるがせにできませんでした。九月末になるともう、たんす部屋のたんすはみな、夏冬の衣の入れ替えが終わっています。

『おてんば歳時記』酒巻寿著

衣がえ

季節の変化によって、衣服を着かえることを衣がえといいます。

ころもがえ短しと母の笑びかな　松兄

育ちざかりの子どもに、去年の夏服はツンツルテン。背丈の伸びたうれしさと、物価高で苦しい財布をやりくりして買わなければならないつらさの経験がある現代の母親にとっても、この江戸期の俳句は共感を覚えさせます。

衣がえは、平安以降、宮廷文化のなかで定着。四月一日に袷、五月五日にかたびらというようにこまごまと四季の衣服をとりかえる日がきまりました。江戸時代には四月一日、十月一日を春、夏の衣服をかえる日としました。

『源氏物語』の人たちのようにたくさんの衣服はなくても、旧四月一日になって綿入れをぬぎ、袷にかえた庶民はやはり、身も心も軽やかに季節感を味わったことでしょう。

ころもがえいきたうなりし隅田川　暁台

むずかしい名字の代表に「四月一日」というのがあります。これは、わたぬきと読みます。まるでクイズのようですが「四月朔日」さんも「更衣」さんもわたぬきさんです。青葉若葉の四月一日。衣服をたくさんもたない庶民は冬着から綿をぬいて袷にし、衣がえを楽しんだのでしょう。

衣がえせしや綿はす谷の家　句空

私が子どもの頃は六月一日が衣がえでした。いまでも六月一日に夏服に着かえて登校する中高校生をみかけますが、以前は軍人、警察官、学生といっせいに夏服で衣がえがめだちました。

いまは暖房完備なら冬に夏服もよし、汗をかいてもお洒落のためなら暑中にも毛皮を着る時代で、和服も夏冬単物で通用します。やがて歳時記から衣がえは消えるでしょう。何を着ようが拘束されないのびやかさはたいせつにしたいのですが、ジーパンスタイル、大振袖と好みは結構としても、かねさえあれば衣がえはどんなものでしょう。芭蕉の門弟女流の句には心に残るものがあります。

ころもがえみづから織らぬ罪深し　その

『くらしの歳時記』　矢島せい子著

押入れの整理

押入れ（押込みとも関西ではいいます）とは、半間でも、一間でも、二段仕切りが普通と相場が決まっていますが、おばあちゃまは、これを三段と四段仕切りの二通りに改造され、とても便利に使っていらっしゃいます。

三段の押入れは蒲団専用です。上段には、その季節以外の掛け蒲団、毛布、枕などがしまわれており、中段が出し入れしやすいから、ここへふだんよく使う、その季節の蒲団、下段はマットやふだん用の座蒲団を入れる場所となっております。こうしますと、身体に無理なく、楽に出し入れが出来るというわけです。

（中略）

もう一つの四段式の方は、整理専用として使用されており、段ごとに大きな深い箱をしつらえ、上から冬服、合服、夏服、それに下着と分けて収納されています。そして、それぞれの箱を、上段から中段へ、下段から最上段へと、使う季節に応じて箱の位置を使いやすいように置き換えておられます。

しかも奥行が深いので、表側と奥側と二つに区分してありますから、収納スペースが八つあるわけで、入れ替え自由というのが、おばあちゃまのご自慢です。

その上、各段、各区分に内容物を詳しく書いたカードを貼り、出し入れ、しまい忘れを防ぐとともに、探す時間の節約ができるようになっております。箱の隅には、それぞれ乾燥剤と防虫剤がきちんと入っていて、これにも感心いたしました。

『おばあさんの引出し』佐橋慶女著

土用

以前、樟脳などの防虫剤が出はじめた頃は、まだ家事のなかで「土用干」という仕事はかかせないものでした。家中に張り渡した細引きに、よそゆきからちょいちょい着まで、夏冬いっさいの衣類をひろげ、土用のうちに風を入れ、かびや害虫を除きます。

『くらしの歳時記』矢島せい子著

土用干し

七月二十日は土用の入り。夏の土用（土用は春、秋、冬にもあります）は、この日から八月上旬まで、一年中で一番暑い季節とされます、これはとかく季節の実感と合わない暦の中では、めずらしく合うものの一つではないでしょうか。この期間は、梅雨が明けて、一応湿気が抜けたあと、いま風にいえば、太平洋高気圧に日本が覆われますから、乾燥高温の風が吹くときでもあります。

夏は湿度が高いと一概にはいえなくて、土用期間中は昔から土用干しに最適な季節として、衣類その他の通気乾燥をしてきました。これは、私たちの祖先の節のある生活とその知恵の深さを示すもので、まことに理にかなったものといえます。

というのも、夏の土用は冬の土用（寒中）干しよりも効果は少ないのですが（虫干しとしては寒中の方が数段上）、この時期、簞笥の中、押入れの中など、意外と梅雨の湿気が残っているものです。下駄箱に入れたままの冬の靴などにもカビが生えていることに気がつきます。

『おばあさんの引出し』佐橋慶女著

注および引用文献

(1) 依田新他『教科教育法　小学校基本用語』日本標準　1981　128ページ
(2) 岩井弘美子「問題解決力を育てる体験的学習の展開」赤井・吉原編『これからの家庭科教育』建帛社　1985　161ページ
(3) 牧野カツ子「家庭科で育成する能力」木村・工藤・平田・牧野『現代家庭科教育法』家政教育社　1980　92ページ
(4) 村田泰彦編『教科教育法　小学校家庭』日本標準　1981　161ページ
(5) 滝口氏は「体験」ではなく「経験」を使用している。
ただし「経験」とは，デューイの教育哲学の特色を示すものである。彼の実験主義の哲学を教育へ適用し，生徒を学習の主体としてとらえ，主体と環境との相互作用を経験とよんだ。この経験の改造を教育の本質と考えた。
広岡亮蔵『授業大事典』明治図書
(6) 前掲書(4)に同じ　162ページ
(7) 教授項目の，きな粉，とうふ，ゆば，みその各々は食品名で構成されているが，みそ汁だけが，調理名になっている。
(8) 前掲書(4)に同じ　170ページ
(9) 前掲書(4)に同じ　179ページ
(10) 家庭科教育研究者連盟編『食生活をどう教えるか』あゆみ出版　1983　25ページ
(11) 労働の教育的意義は18世紀ルソー以来，多くの教育学者によって重視されてきた。ひとりひとりの子どもの適性の発見，連帯感，協力，他人の喜びの感受性，社会関係の認識などがあげられる。1970年代からは，新たに「勤労体験」(Work experience) の学校教育への導入が世界的な動向となっている。
(12) 桑井いね
(13) 佐橋慶女
(14) 三都市とは，サンフランシスコ，パリ，ホンコンである。
(15) 衣教材，研究群の配布資料（別掲）表7
(16) 安井俊夫『子どもと学ぶ歴史の授業』地歴社　1977　247ページ
(17) 住教材　研究群の配布資料（別掲）表8
(18) 『国語大辞典』　小学館
(19) 『広辞苑　第二版増訂版』　岩波書店
(20) 『児童学事典』　光生館

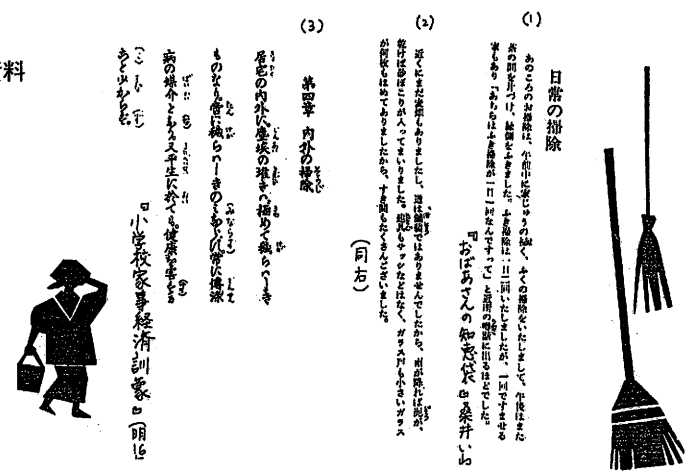



表8　住教材研究群の配布資料